

書名：天の瞳

著者：灰谷健次郎

出版社：角川書店

出版年月：1998年2月～2009年7月

総ページ数：2982ページ（全9冊）

ISBN：4048730967（幼年編Ⅰ）4048730975（幼年編Ⅱ）
4048731009（少年編Ⅰ）4048731599（少年編Ⅱ）
4048732048（成長編Ⅰ）4048732862（成長編Ⅱ）
4048733796（あすなろ編Ⅰ）4048735128（あすなろ編Ⅱ）
4043520379（最終話）



推薦者

田村隆宏

鳴門教育大学大学院教授
幼年発達支援コース

趣味といえば現実逃避系一辺倒の私にとって読書は最も大切なものの一つです。本の中でも読めばすぐに現実から引き離され、別世界に誘ってくれる小説を最もよく手にとることから、推薦図書ももちろん小説から、と考えついたまではよかったです。お薦め作品があまりにも多すぎて、1つを選ぶのに大変苦労しました。私が神と崇める宮部みゆき作品の弱者へのエールに満ちた癒しの世界は絶対にお薦めですし、かつて高校の国語教師をしながら覆面作家をしていた北村薫氏の心温まる作品も捨てがたい。重松清氏の子どもに対する優しさ溢れる学校物も魅力満載ですし、どんな題材でも楽しく読ませてくれる百田尚樹氏の作品も・・・と散々悩んだわけですが、ここでの推薦図書はこれらお気に入り作家達の作品を敢えて外して、教師を志す本学の学生諸氏に是非とも読んでほしいもので、かつ私の心にも深く残っている作品ということで1つを選びました。

その作品は灰谷健次郎氏の遺作「天の瞳」です。代表作「兎の眼」や「太陽の子」、「わたしの出会った子どもたち」ではないのを意外に思われる方があるかもしれませんが、敢えて未完の超大作「天の瞳」なのです。この作品の大筋は倫太郎という主人公の幼児期から中学生時代までの成長物語なのですが、当初、いわゆる「気になる子」であった倫太郎やその仲間達が周囲の様々な魅力的な人物とのかかわりの中でしっかりと成長していく姿が数々の印象的なエピソードを交えながら丹念に描かれています。読み進める中で、読者は既成の子ども観を大いに揺さぶられ、望ましい教育のあり方について改めてじっくりと考えさせられることでしょう。

少しネタバレになりますが（未読の方はご注意ください）、終盤、倫太郎の在籍する中学校で大きな問題が発生し、その解決に向けて倫太郎やその仲間達が教師や保護者をも巻き込んで動き出そうとしているところで、ストーリーは未完のまま終わってしまうのですが、未完であるが故にその結末を知りたかったというあまりにも大きな渴望感からかえって心に深く残るものがあるのです。残念ながら作者病没のために完結されなかったわけですが、私には、この作品が未完であることに、「この解決の有様は教育に携わる方々のそれぞれの心の中で思い描いて日々の実践に活かして下さい。私は見ていますよ。」という灰谷氏の天からのメッセージがあるようにも思われて、改めて「天の瞳」というタイトルが至極意味深長なものに感じられるのです。

幼年編、少年編、成長編、あすなろ編が各2巻ずつに、灰谷氏没後に遺稿を集めた最終話と9冊分にもなる超大作ですが、長さを全く感じさせないどころか、まだまだずっと倫太郎の成長を見続けたかったとさえ思われます。小説好きの方に生涯ベスト1作品を尋ねたところ、この「天の瞳」を挙げた方が何人かありましたから、お薦めに間違いはないかと思えます。是非手にとって子どもや教育についてじっくりと考えてみて下さい。そして、読後の渴望感を将来発揮される教育実践力の糧にしてもらえれば、こんなに嬉しいことはありません。

